

ASD 児へのコミュニケーションと情動調整の発達支援

—SCERTS モデルにおける MA&PA アプローチの視点から—

○氏原佳香

吉井勘人

(山梨県立やまびこ支援学校) (山梨大学大学院総合研究部教育学域)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 コミュニケーション 情動調整

I. 問題と目的

Prizant et al. (2006) により提唱された SCERTS モデルでは、ASD 児者のコミュニケーションと情動調整の能力の発達促進を教育的取組の最優先事項として位置づけている。SCERTS モデルにおける MA&PA アプローチは、①計画的活動ルーティン、②設計された活動や環境、③修正された自然な活動や環境、④自然にある出来事や環境の4つの水準があり、これらを1つの連続体として支援を行うことの有益さを指摘している。本研究では、コミュニケーションと情動調整に課題のある ASD 児に対して、MA&PA アプローチの視点から発達支援を試みる。コミュニケーションについては、①の視点から、共同行為ルーティンを用いた支援を行い、選択要求のコミュニケーション機能の獲得過程を検討する。情動調整については、④の視点から、様々な活動の中で ASD 児が自身の情動を安定させるために情動調整ツールを選択する機会を提供し、情動調整のためのツールを選択要求する形態の変化を検討する。以上より、ASD 児のコミュニケーションと情動調整の変化における相互の関連を検討する。

II. 方法

1. 対象児 自閉症の女兒、特別支援学校中学部2年に在籍していた。支援開始時のCAは13歳3か月で、MAは3歳11か月(田中ビネー式知能検査)であった。

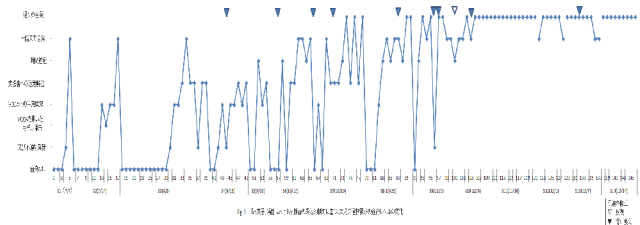
行動観察から、コミュニケーションでは、教師に対する自発的な要求が少なかった。加えて、選択肢のカードが提示されている場合でも「どっちがいい?」の質問を即時エコーリアで応答することが多かった。情動調整は、SAPの情動調整領域(Prizant et al., 2006)を参考に評価した。集団授業で指示に応じられず、苦痛を感じたり不安が高くなったりした際には、相手に拒否や抗議の意図を伝達することは見られず、自分の頭を叩く、泣くといった情動調整の不全が生じることが多かった。本児は、フラストレーションが高い状況では、唇を手で触る、服の袖を噛むといった自己調整の行動方略による情動調整がみられていた。

2. コミュニケーション (1) 支援期間: 週1度の割合で7~12カ月の5ヶ月間(夏季休業を除き)、146試行実施された。1Sの所要時間は約40分であった。(2) 支援文脈、支援目標、手続き: 自立活動の中の一部としてのおやつを「準備」、「お菓子」、「ジュース」の3場面から成る共同行為ルーティンとして構造化した。「お菓子」場面は、支援者は3種類のお菓子が入った箱を本児に提示して「どれがいいですか?」と質問した。質問に対して本児は好みのお菓子を1つ選択して持ちあげて、「ください」と発語で要求することを目標行動とした。目標行動が自発的に生起しない場合には、①時間遅延、②支援者への注意喚起、③VOCAへの注意喚起、④VOCAを用いたモデル提示の順に援助を行った。(3) コミュニケーションの記録と分析 DVカメラで記録した。「選択要求」と「伝達の修復」 選択要求は以下の8段階で評価した。(①二語文の自発、②一語文の自発、③時間遅延、④支援者への注意喚起、⑤VOCAへの注意喚起、⑥VOCAを用いたモデル提示、⑦文脈不適切発語、⑧自発なし。)

3. 情動調整 (1) 支援期間: 10月~12月の2ヵ月間で132試行実施した。(2) 文脈、支援目標、支援手続き: 日常生活の様々な場面(教室、体育館、特別教室など)において、「遅延エコーリアが頻発する」「文脈と関連のない笑いが生じる」といった情動調整の不全に入る兆候や「自分の頭を叩く」といった情動調整不全の状態になった際に、情動調整ツールの選択カード(リングやハンドクリーム等の4種)の中から、指差し、または、言語によってツールを選択して使用すること等を支援目標とした。そのために2つの援助を行った。1つは、選択カードの提示、もう1つは、ツールを本児に手渡す(緊急性が高い場合)。(3) 情動調整の記録と分析 チェックシートを作成して記録した。情動調整ツールの選択要求と情動調整方略のレポートリーといった2つの観点から評価した。選択要求は、①発語、②指差しと発語、③指差し、④手渡し、その他に、教師が選択カードを提示していない際の自発による行動方略を記録した。

III. 結果

1. コミュニケーション (Fig.1参照) 事前評価では、言語による選択要求の自発はほとんど生起しなかった。支援期には、段階的援助を経て、自発的な選択要求が増加した。段階的援助を取り除いた際にも言語による選択要求は安定して生起した。



2. 情動調整 情動調整ツールの選択は、まず、S5の開始~S6の開始前までの期間において「指差し」が生起するようになり、その次に、S8の開始~S9の開始前までの期間において、「発語と指差し」と「発語」が生起するようになった。その後も、発語による情動調整ツールの選択要求は生起することが示された。加えて、情動調整方略のレポートリーに広がりが見られ、複数の行為で自身の情動を安定させるようになった。

IV. 考察

おやつでの「選択要求」の変化と情動調整のツールの選択での伝達の変化をみると、おやつでの言語による選択要求の自発は、S6(10/13)から始まり、徐々に増加傾向を示した。一方、情動調整のツールの選択場面は、S8(10/26)から指差しと言語を用いて情動調整のツールを選択する行動がみられるようになった。以上より、お菓子の選択場面で自発的な言語による選択要求がやや先行し、その後、情動調整方略の選択場面で、言語と指差しを用いて情動調整のツールを選択できるようになった。このことから、物の選択要求と情動調整ツールの選択要求との間に機能連関があったと想定される。

(UJIHARA Yoshika, YOSHII Sadahito)